

第 405 回地震調査委員会資料

令和 6 年(2024 年)能登半島地震に伴う

海底活断層の上下変位

令和 6 年 9 月 10 日



国立研究開発法人
産業技術総合研究所

2007 年 7 月及び 2008 年 7-8 月に取得した能登半島北岸沖のブーマー音波探査断面と、2024 年 4 月に同じ測線ではほぼ同じ仕様で取得した探査断面を比較し、能登半島北岸断層帯とその南西側の門前断層帯門前沖区間及び海士岬沖東断層の一部に沿った上下変位の分布と量をカラー化して図示した。なお、この図には、部分的に 1m 程度の誤差と、断層活動ではないと推定される変動が含まれている可能性がある。

門前沖区間（門前断層帯）の東部（NK12-15）では断層に沿って 1~2 m の南東側隆起の変位が認められ、最も東側の測線（NK16）では 4 m 以上の隆起が生じた可能性がある。その南側の海士岬沖東断層でも一部（NK01）で東側隆起の変位があった可能性がある。

猿山沖区間（能登半島北岸断層帯）の南西部（NK17-24）では 2 m 以上の南東側隆起の変位が断層に沿って生じ、海岸に近い部分では、変位量が 4 m を超える場所がある。猿山沖区間東部（NK25-31）では断層に沿った上下変位は顕著ではない。

輪島沖区間（能登半島北岸断層帯）の西部では断層線が 3 つ分かれ、そのうち北側 2 列の断層の NK32 から NK37 では上下変位は顕著ではないが、最も北の断層線は区間東部の NK38 から NK44 まで連続し、2~4 m の変位が認められる。最も南側の断層線沿い（NK32-39）では、1~3 m の南側隆起の変位が認められる。

輪島沖区間と珠洲沖区間（能登半島北岸断層帯）の境界付近からその東側（NK44-49）では北側に新たな断層が 2 列出現し、全体として 2~4 m の南側隆起の変位が認められる。NK50 より東側の珠洲沖区間の断層沿いでは、2~4 m の南東側隆起の変位が認められ、東側で大きくなる傾向がある。

上記の音波探査断面で認められた断層変位の範囲は、海上保安庁から公表された海底地形の隆起域とほぼ一致する。

図の説明

2007 年 7 月及び 2008 年 7-8 月と、2024 年 4 月に同じ測線に沿って取得したブーマー音波探査断面で認定される断層の下盤側（北西側）では海底の水深が変化していないと仮定し、上盤側（南東側）の海底の深度差をカラーで示した。区間名とその範囲、測線の番号も示す。また海上保安庁から公表された海底地形の変化量マップを、NK22 付近、NK40-47 付近、NK52-56 付近に重ねて示している。赤線は、「日本海側の海域活断層の長期評価―兵庫県北方沖～新潟県上越地方沖―（令和 6 年 8 月版）」の断層線。

